



Rainbow letter

2016.6
No.4

日本周産期メンタルヘルス学会・ニュースレター

イベント参加報告 // 周産期精神保健の新たな地平 — 新生児に対して何が出来るのか？

平成 28 年 3 月 5 日から 6 日にかけて第 7 回滋賀医科大学地域精神医療学講座講演会が開催されました。今回は講座開設後の節目として、地域精神医療においても大きなテーマである児童思春期からの精神保健の問題への早期介入と並んで、2 日目に周産期精神保健が大きく取り上げられました。今回は英国からのゲストスピーカーとしてロンドン大学の Argyris Stringaris 医師が招聘され、すべての講義とディスカッションが日英の同時通訳で行われました。Stringaris 医師は児童精神科医として子どもの気分障害の研究に取り組むと共に、その発達経路の研究において親の精神保健の問題と子どもの心の問題の関連を解明すべく、周産期からスタートする双生児研究プロジェクトを立ち上げ妊娠期の親の精神保健の問題に注目しています。妊婦のうつ病が胎児プログラミングや母子相互作用のメカニズムを介して子どものこころの問題に影響を与えることを示すエビデンスを紹介されました。さらに環境要因について双生児コホート研究などで分析していくことで、こころの問題の世代間伝達への周産期からの介入が実現できる可能性を呈示されました。

親から子へこころの問題の世代間伝達や乳幼児期の不適切な養育の予防は、周産期精神保健の重要なテーマです。九州大学の吉田敬子医師(当学会顧問)が、上記の Stringaris 医師の視点を臨時的な観点から「ライフサイクルの視点で子どもの育ちを考える」というタイトルの講演で概説しました。また北村メンタルヘルス研究所の北村俊則医師(当学会顧問)からは「産後うつ病、ボンディング障害、虐待的育児: 症状の治療から母児関係の治療へのパラダイムシフト」という不適切養育の予防という観点から周産期精神保健の意義を見直す示唆に富む講演がありました。

多職種が参加する本講演会では産科医療の現場からの発表も加わり、さらに広がりのある議論がなされました。当地の滋賀医科大学での取り組みとして小児看護の立場から桑田弘美さんが子育てで不安をもつ妊産婦と家族のウェルビーイングについて周産期医療の立場からは石河頭子医師が精神疾患合併妊娠の新生児予後について重要な実態を報告されました。また香川大学産婦人科教授の秦利之医師による胎児の 4D エコー画像の研究の紹介は胎児のこころの存在について想像力をかき立てる楽しいお話が聞け、どの演題に対しても各分野の参加者から実践的な質問も多く出る活気ある講演会でした。

(正会員/山下洋/九州大学病院子どもこころの診療部)

コラム // 産婦人科とメンタルヘルス

産婦人科医の息子であった私は、開業医として帝王切開術の麻酔ができるように先に麻酔科を研修した。その時に、羊水穿刺後羊水塞栓を発症した症例が、手術室で亡くなった。これがきっかけとなって今でも産科救急や婦人科手術の出血量低減などに興味をもって臨床を行っているが、外来も大好きである。

入局 3 年目に最も忙しい関連病院での研修を終え、がんの手術も母体救急の症例もたくさん経験して、鼻高々で大学に戻ってきた。最初の外勤では何でもできるとしており、はりきって婦人科外来を担当した。ある時、更年期障害の患者が再診で受診し、前の担当医の薬を同様に処方した。翌週病院いくと部長から、「先週、君のみた患者が、自殺した」と話され、今でもトラウマになっている。

言葉少なめであったが、普通に意思疎通もできていたと思っていたのに、自殺する状態に気づけず、防止もできず、自分の能力不足を嘆いたものである。

大学での 6 年間の研修を終え、新設の埼玉医大総合医療センターの立ち上げに 5 名で異動した。最初は婦人科医長であったので、婦人科を中心に診療した。人手不足で専門性などなく何でも診た。性同一性障害の性別適合手術にも参加していたので、手術前のメンタルでの悲惨な状況も知っていた。月経前症候群では、子供への暴力で、その時期には車中で夜を過ごす人もいた。EP 剤で著効したのは驚いたが、ホルモン作用には興味を持ち、学位の“オキントシン”の研究は続けている。更年期障害の自律神経症状や不定愁訴、うつ状態治療にも多く関わった。いつも吐き気が襲う症例や腹痛を強く訴える症例など、精神科、産婦人科、内科などいろいろな病院や有名な医師を回ってきて受診する症例も多い。器質的異常はないもののみずはその症状があることを認めて、「気長にやりましょう。体質を変えましょう」などと言っていた薬も出さず、話しを聞いていくとよくなる症例があることに気づいた。また、「今まで何をしても治らなかったのによくなった！」と時折“神”になることもあるので気を良くして愚痴外来をしている。後に中野班の産後うつ病調査に参加して北村俊則先生の講演を聴いてはじめて医療者側のスタンスを理解した。BSL の学生は、「あの患者は病気ですか？」などと言ったりするが、専門医でもないもので管理加算も取れない。順天堂大学では、紹介患者は手術をして近医に戻っていくが、一般外来から回ってくる不定愁訴の患者はほとんど溜まってくるが、楽しんで診ている。

(顧問/竹田省/順天堂大学産婦人科学講座教授)

おしらせ // 臨床で働きながら研究をしよう ～統計の裏技と SPSS の使い方～

これまで北村メンタルヘルス研究所が日本周産期メンタルヘルス学会との共催で連続研修会「臨床で働きながら研究をしよう: 統計の裏技と SPSS の使い方」を行っています。このたび、新しく立ち上がった北村メンタルヘルス学術振興財団がこの研修会を引き継ぐことになり、ふたたび本学会との共催で今年度のコースを開催することになりました。

医療・福祉・教育現場で働いている医師・看護師・助産師・保健師・ケースワーカー・心理士・保育士の皆さんが、御自分の疑問について研究デザインを組んで、データを収集し、パソコンに入力してから、統計法も使って解析し、結果を報告できるようになるための連続研修会です。研究デザイン・使用する尺度・統計法・レポートの書き方は表裏一体です。最初に架空のデータセット(事例は産後うつ病)を準備し、これをもとに実例を基礎に研究と統計の基礎を、ミニレクチャーと SPSS の実習を通じて学びます。数学の専門家はいだれも教えてくれなかった「裏技」を教授します。

入門コース 2016 年 6 月 18 日(土)開始/中級コース 2016 年 9 月 18 日(日)開始/上級コース 2017 年 1 月 8 日(日)開始。会場は同財団会議室(渋谷区富ヶ谷)。いずれの研修会も講師は北村メンタルヘルス研究所所長北村俊則。詳細は同財団 HP <http://www.kitamura-foundation.org> にて確認、あるいはメールでの問い合わせで。(顧問/北村俊則/北村メンタルヘルス学術振興財団代表理事)

